目　次

まえがき……3

第一部　王朝物語の諸相……5

第一章　『竹取物語』から見える「物語」の表現方法……7

第二章　『源氏物語』の「左大臣」は何歳なのか……23

第三章　『源氏物語』の「左中弁」は何処へ行くのか……39

第四章　『源氏物語』玉鬘十帖の構造再考……53

第五章　『源氏物語』の風景をつむぐことば……77

第六章　『源氏物語』夢浮橋巻の構造……95

第七章　「物語」はいつ閉じられるのか……111

第八章　『堤中納言物語』「花桜折る少将」の中将の乳母とは本当に姫君の乳母なのか……129

第二部　王朝物語の転生……145
第一章　『偐紫田舎源氏』に見る「翻案」の性格……147
第二章　『竹取物語』の映像化……163
第三章　『源氏物語』の映像化……177
第四章　『源氏物語』のマンガ化……213
第五章　豊子愷による中国語訳『源氏物語』……241
第三部　余滴……261
第一章　皇族賜姓考……263
第二章　「百年に一年たらぬ」考……269
初出一覧……275
あとがき……277
索引　人名・書名・事項……279

まえがき

学位請求論文を中心にまとめた『源氏物語解析』（明治書院　二〇一〇年）を世に問うてから早十五年ほどになる。「そろそろ一書にまとめられるくらいのものは貯まったのではないか」という、武蔵野書院の有り難い水向けをきっかけとして、その後に書いたもの、或いは一書の体裁上、そこには収められなかったもの等をかき集めてみると、確かにそのくらいの量にはなったが、正直自分の目で見ても聊か毛色の変わったものとなった。

しかしながら、いざ手を入れ始めてみると、これも自分でも意外なほどに、それぞれの論が正しく連関している。これはつまり、自分はそのような発想をする人間だからこのような論になったのであり、また、聊か不遜な物言いをすれば、そこに文学をどう考えたら良いか考えてほしいと思う視点も存するので、総体的にはいじることなく、そのまま世に問うことにした。

なお、本書における『源氏物語』の引用は、基本的には大島本により、読み易いように句点、濁点等を加え、所々表記を改めた。また、参照を容易にするため、大島本を比較的忠実に翻刻したとされる岩波の新日本古典文学大系の巻数・頁数で示すことにした。これは別に大島本を最善本と考えているからではなく、現状ではどの写本が最善か不明で、かと言って、如何なる形であれ、複数の写本を取り合わせるのは原典からますます遠ざかることになるのではないかと考えた結果の、取り敢えずの処置と理解していただければ幸甚である。

なお、それ以外の平安朝の古典作品の引用は、小学館の日本古典文学全集によることを原則とし、その頁数（複数巻に跨がる作品は巻数も）を付す。例外はその都度記載する。